

研究ノート

福井藩における藩営除痘館の開設とその運営

柳沢美美子*

はじめに

1. 福井藩における種痘導入
2. 種痘掛り目付の任命と藩営除痘館の開設
 - (1) 絶苗の危機
 - (2) 除痘館の体制
 - (3) 除痘館の運営
3. 種痘関係医師等への褒賞

おわりに

はじめに

福井県文書館では、平成30年度企画展示「発掘！明治を拓いた意外な福井藩士たち」（平成30年8月24日～10月24日）において、福井藩藩政資料である松平文庫（福井県立図書館保管）に残る「士族」、「剥札」、「士族略履歴」、「子弟輩」、「元陪臣」などの履歴資料¹⁾をもとに、幕末から明治にかけて活躍した福井藩士を紹介した。

その際、「痘苗導入後の種痘事業を支えた目付と医師たち」と題し、福井藩の種痘事業が多数の藩医・町医を組織して展開されたことを紹介した。文末の表4はこの展示内容に、その後確認できた「雑類」²⁾に掲載された町医等を加えて作成したものである。

この表からみる福井藩の種痘奨励は、種痘を担当する目付石原甚十郎（?～1863年）が初めて任命された1851年（嘉永4）8月以降、海福猪兵衛・小宮山周蔵・出淵伝之丞（出淵の江戸出府中には、堀信尹（権之助）・千本東岫（藤左衛門）が代行）・市村市十郎ら5名によって、65年（慶応元）までおよそ14年間にわたって継続された。従来から石原甚十郎が種痘事業に関わったことは知られていたが、その後も目付の任務として引き継がれていたこと、種痘にかかわって藩の褒賞を受けた医師は103名（藩医50名、町医53名）と多数に及んだことが、初めて明らかになった。

これまで福井藩における種痘は、福井城下の町医笠原良策（白翁、1809～80年）の奮闘によって、導入・普及されたことが知られてきた。確かに、1849年（嘉永2）の痘苗導入から藩営除痘館が開館する51年までに限ってみれば、伴五十嗣郎氏の以下の指摘は、全く的確なものといえるだろう。「福井藩の種痘は、側用人中根雪江・匙医師の重鎮半井仲庵・種痘接続掛りの目付石原甚十郎など、少数

* 福井県文書館副館長

ながら強力で有能な藩関係者の助力と、藩主松平春嶽の理解によるところ大であったとは言え、専ら笠原白翁（通称良策）一人の情熱と努力により完遂されたものといって過言でない³⁾。

しかしながら、痘苗導入から明治初期までの20年間を視野に入れるならば、笠原を中心に10人ほどの町医によって担われたのは、導入初期の2年間に過ぎない。またこれまで研究⁴⁾は、主として笠原の記した「白神痘用往来」等の記録⁵⁾に依拠して進められてきた。同時代に記されたこれらの資料は、種痘の実務とその課題を詳細に浮き彫りにする重要な記録であるが、その下限は安政期までであり、当然のことではあるが笠原の関心と視点に制約されている。

本稿では、従来から用いられてきた笠原の記録に加え、海原亮氏が紹介した「牛痘所図面」「越ノ前州 除痘館手続書」（後述）、福井藩の履歴資料等を用い、1851年（嘉永4）の藩営除痘館の開設をそれまでの福井藩における種痘事業が大きく転換する画期と捉えて、その運営の特徴、担い手の広がり等を考察したい。

1. 福井藩における種痘導入

まず、福井藩への痘苗の導入と、その後の仮除痘館の開設、福井藩の種痘・医学関連の触書を概観しておこう。

1849年（嘉永2）6月26日、バタヴィアから長崎にもたらされた牛痘苗を用いて佐賀藩医植林宗建とオランダ商館医モーニッケによって種痘が施され、その一部が善感した。その痘苗は、長崎・佐賀を起点に複数の蘭方医たちを中心とするネットワークによって、5か月ほどの短い間に京都・大阪、江戸、そして福井へと伝播した⁶⁾。

福井にもたらされた痘苗は、9月に長崎から京都の日野鼎哉（笠原の師）まで届けられ、その痘癩をもとにした京都での種痘に笠原自身も関わった後、大坂の緒方洪庵らへ分苗⁷⁾し、7日目ごとに子どもから子どもに植え継ぐ周到な方法⁸⁾で、11月下旬、雪の栃ノ木峠を越えて福井へ運んだものであったことはよく知られている（11月25日着）⁹⁾。笠原はこの痘苗を「天下一同所漏なく相弘申度」として、接種と鑑定方法を熟知することを条件に府中・鯖江・大野・敦賀・大聖寺・金沢・富山などへと分苗していった¹⁰⁾。

一方、笠原は京都から直接、福井藩江戸藩邸へ痘苗を送ろうとしたが迅速には実現しなかった。すでに山崎佐氏が指摘したように江戸藩邸への到着は11月28日であった。翌29日、霊岸島中屋敷で半井仲庵（元冲、1812～72年）¹¹⁾が市川斎宮（岩之進）の娘に接種したのが福井藩江戸藩邸での最初の種痘である。これより早く佐賀藩から江戸に到着した痘苗は、伊東玄朴から桑田立斎が受継ぎ半井は11月18日からその種痘を手伝うことで詳細な接種法を学んでいた¹²⁾。

笠原は福井に帰着したその日から種痘を開始する。「仮除痘館」とした浜町自宅の隣家は、木田町の家屋敷を売却¹³⁾して購入・改造したもので、25畳と狭隘であった。この時、仮除痘館の運営に関わったのは、惣裁となった笠原のほか、三崎玉雲¹⁴⁾・大岩主一¹⁵⁾・笠原健蔵（浜人、良策弟・養子）・宮永俊策・大岩本立（円、主一養子）・笠原元蔵¹⁶⁾・水野玖多・宮永良丹¹⁷⁾・山本宗平¹⁸⁾・持田礼造で、いずれも福井城下の町医であった¹⁹⁾。

笠原は意識的に「仮」除痘館と称し、より広い建物の提供を藩に求めていく²⁰⁾。しかし、伴氏がす

表1 福井藩の種痘事業への対応

年	月日	事 項
1849年 (嘉永2)	11.25	(笠原良策、城下浜町自宅隣家〔久世貞左衛門宅〕を仮除痘館に種痘開始)
50年 (嘉永3)	2.25	種痘後の再感はなく、その効験は間違いないこと、除痘所に年々20俵ずつ下付するので、謝礼(「謝物」)の支払いなく町在普く療治を受けるよう達(側用人→藩医最上席の匙医師共、目付→組支配面々)
51年 (嘉永4)	8.23	目付の石原甚十郎を種痘接続掛りに任命(～市村市十郎1865. 閏5.21)
	8.29	痘苗接続も覚束ない為体なので、種痘事業を済世館(医学所)へ附属、種痘接続の見積りやそれぞれの役割を申談じ相達すべきことを達(側用人→匙医師共)
	9.18	謝礼等を一切貪着しないこと、家中の未痘の小児を取調べ、接種の徹底を触(目付→医師・家中)
	10.27	下江戸町元御預所役所を当分仮除痘館とする。笠原良策の除痘所へ年々下し置いた20俵は、以後下されず、達(家老→御奉行・目付)
	11. 2	下江戸町除痘館が設立され、御医師中へ移痘されたので、未痘児を召し連れるよう、その際兼ねて仰せ出らる通、一切謝礼には及ばないこと、触(郡奉行→村々諸百姓)
55年 (安政2)	1.23	除痘館、医学所の東側に増築し附設。普請3月下旬に完成
56年 (安政3)	1.23	医業はこれまで漢方で治療してきたが、近來西洋医学が次第に盛んになっている。当春坪井信良を召し連れるので同人へ相談し、修行すること、以来藩医・町医とも漢蘭兼学とすること、達(側用人→御匙医師共)
	5.13	近來町医師に対し、がさつの族もあるので、町医師の輕蔑を受けないよう謙遜を本とし、家業に厚く修行するよう達(側用人→表医師) 近來藩医に対して不遜の者もあるので、以来身分を顧み、専ら礼讓のふうに基づき医業に修行致すべきよう達(家老→町奉行)
66年 (慶応2)	12.17	除痘館出精の藩医・町医に対して年々実施してきた褒詞を廃止、達(家老→匙医師)
69年 (明治2)	6.11	種痘の官府御賄を廃止、種痘希望者は相応の報酬を指し出すべく、貧窮者はその儀に及ばず御賄なし下さる旨達(執政→司計局・民政局幹事)

注)『福井市史』資料編6、1999年、「白神痘用留 第三」『福井市史』資料編9、1994年、福井県文書館資料叢書5『越前松平家家譜 慶永2』2010年、福井県文書館資料叢書9『福井藩士履歴1 あ～え』2013年、「医学所規則」山本文書「若越医学史展」展示資料1、「越前世譜 茂昭様御代」福井県文書館幕末福井資料関連データによる。

でに指摘しているように、笠原の願書に対する側用人秋田豊(八郎兵衛)の対応は鈍く²¹⁾、藩主松平慶永が江戸詰中であること理由に「何事も逐々増大ニ相成候方、宜敷」といった具合で、実際に藩が除痘館として貸し渡そうとした「本町二文字屋宗左衛門并之御用宅一円」²²⁾も、二文字屋の嘆願によって不可能となり、当面、笠原が自ら調達した浜町の隣家を使用せざるを得なかった。

この出来事は、種痘導入当初の福井藩と城下の人びとの反応を象徴していたといえよう。種痘に対する人びとの抵抗は予想以上に大きく、翌1850年(嘉永3)2月には「正月末迄詭言益甚敷、悪言日熾」^{ひにさかん}「未種ノ天花ヲ患フルヲ、再感ト称シ」「其他種々ノ悪言不可実述」と記していたように、誹謗中傷も激しくなっていた。社中でいろいろ工夫したものの種痘を乞う者は減りつづけ、側用人秋田まで絶苗の危惧を訴え出ねばならない最初の事態となった²³⁾。

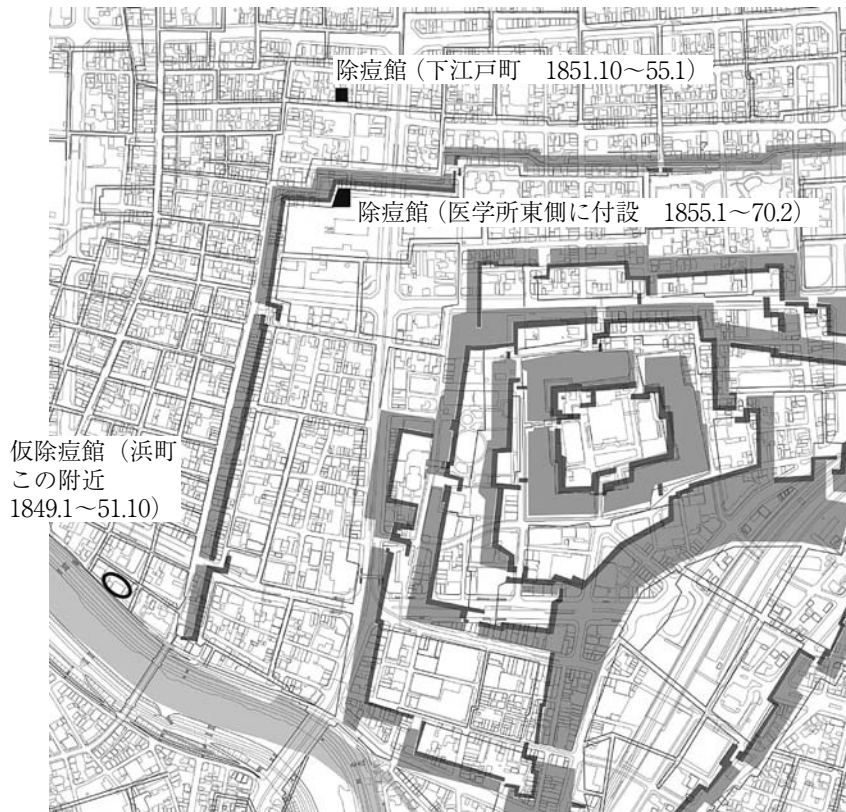
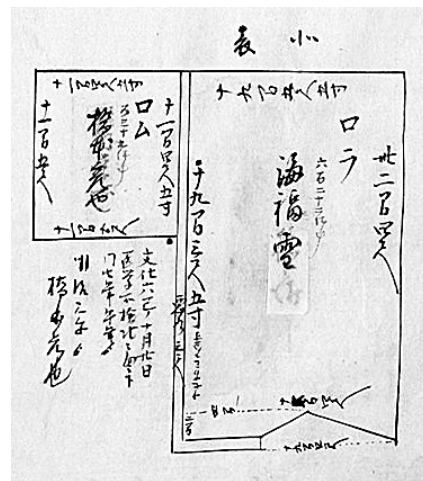


図1 福井藩除痘館の変遷 ベースマップは吉田健氏作成の図による。



画像1 下江戸町除痘館の屋敷地

「御家中屋敷地絵図 中巻」松平文庫 A0143-00465



画像2 医学所の屋敷地（左）

「御家中屋敷地絵図 上巻」松平文庫 A0143-00464

側用人からは、1850年（嘉永3）2月25日付で「種痘之儀追々数多相試候処如法再感ハ無之、弥効驗無相違」として種痘の有効性に間違いがないことが触れられ、それとともに、笠原の仮除痘館に年間米20俵を下付し、これによって謝礼（「謝物」）は不要であるとされた²⁴⁾。あわせて匙医師3名（田代万貞・加藤道庵・細井玄養）を種痘懸りとして仮除痘館を見回り、奥医師のうち1名ずつが館に詰めるべきことが命じられた²⁵⁾。

これが種痘に対して福井藩が出した最初の触書であり、笠原の痘苗導入からすでに3か月が過ぎて

いた。しかし種痘事業は、藩の権威をもって種痘の有効性を告知し、数名の藩医を配置して給米の下げ渡しを行うくらいでは、容易に軌道に乗ることはなかった。

その後、明治初年までの福井藩の種痘事業への対応の概要を示したものが、表1である。

以下では、まず痘苗導入から1851年（嘉永4）年の藩営除痘館開設までの2年間に笠原が直面した種痘継続上の問題点を整理し2（1）、これに対し、種痘掛り目付が指揮した藩営除痘館がどのような運営体制をとり（2）、いかに運営されたか（3）、藩履歴資料から明らかになる種痘事業の担い手3についてみていきたい。

2. 種痘掛り目付の任命と藩営除痘館の開設

（1）絶苗の危機

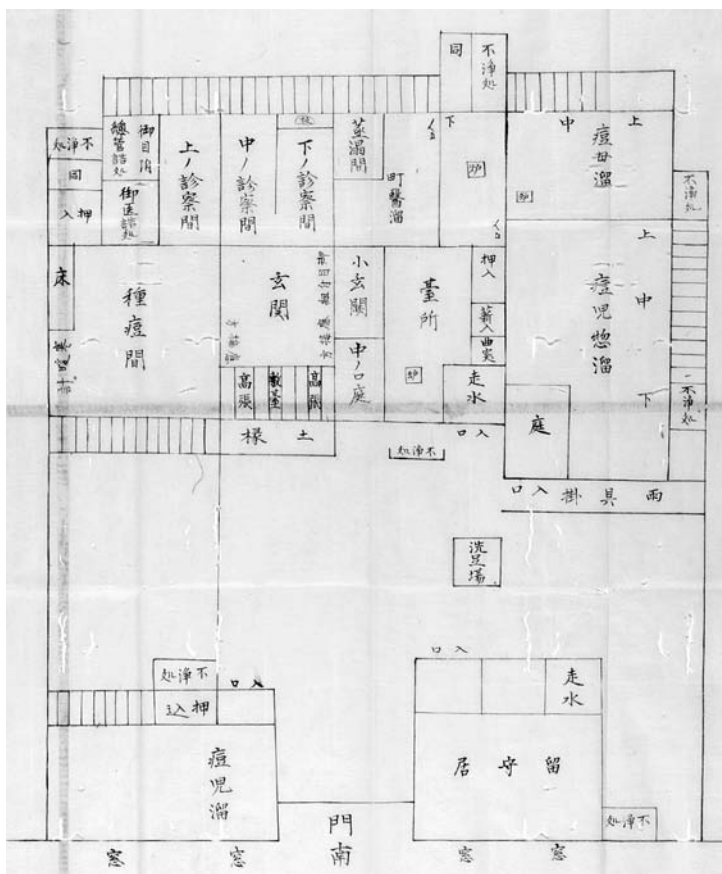
種痘の継続においてもっとも困難な問題は、種痘を受ける子どもを7日目毎に、年間通して切れ目なく集め、痘苗を植え継いでいくことであった。「天夏^{さいびょう}厳冬歳杪春首」²⁶⁾と笠原が記しているように盛夏と厳冬・年末年始には種痘児がとくに集まりにくく、絶苗の危険性が高まった。くわえて痘苗を人伝えで引き継ぐため、7日目に「痘母」として2度目の来診が不可欠であったが、これを欠席する者が少なくなかった。日野鼎哉の京都の除痘館であっても、2か月ほどで閉鎖に追い込まれたという²⁷⁾。

1850年（嘉永3）9月には笠原の周囲でも府中・金津・大野の社中において、最も恐れていた絶苗がたて続けに現実となった²⁸⁾。府中では日野鼎哉に学んだ斎藤策順らが京都から痘苗を運ぶ際の協力者であり、福井城下での種痘開始直後の49年12月5日に伝苗したものだ。金津についても翌年1月24日に井代淡斎に分苗し、山本宗平が指導して4月に除痘所が開館していた²⁹⁾。

さらに笠原社中の医師たちであっても11月には欠席・遅刻がちとなり³⁰⁾、もっとも種痘児が集まりにくいとされた年末年始（1851年）には「貧窮之者ニハ、菓子料手間代等相遣候て」も集まらず全く手詰まりとなったことを、笠原は以下のように記していた。「昨年已来身分をも相忘れ、少分之畜^(畜)ヲモ相傾ケ、日夜排憤勉強仕り、肌肉も如斯瘦衰仕候程ニ御座候へ共、何を申も天性之庸劣、流言ヲ一掃し、世人ヲ随喜信從為致候力無之」「此上者私共自力ニてハ、最早致方無御座候」³¹⁾。

この頃の笠原の藩への要望は、藩が関与して町方や領内全体の未痘児の安定的な参集をはかること³²⁾、専任の財政方を配置することであった。痘苗導入の初期段階が過ぎて家中藩士の子どもの接種が大方終了しており、今後は「町方之小児ニて、痘苗相繋き候より外無御座候」として町方からさらに領内へ種痘の対象を広げる必要を訴えていた³³⁾。

さらに種痘を担った笠原の財政的な逼迫も深刻になっていた。これについては、伴氏が「種痘普及の活動は、白翁の収入源である町医師としての診療を不自由にし、益々家計に圧迫を加える結果となった」³⁴⁾と指摘している。1850年（嘉永3）には藩から20俵の給付があったが、笠原の失費は同年9月までで16貫匁³⁵⁾、出張種痘を行った後の55年（安政2）段階では「手初之義ニて種々艱難之事共相嵩候而度々相談等有之、酒飯其外之雑費莫大」となり、48貫匁の高額に上ったと記している³⁶⁾。日々種痘の実務をこなしながら、館の経理を行うことは「迎も出来不申」「館内勘定方之儀ハ、可然方江被仰付被下置候而、御俵数をも其人江御渡し被下候様」³⁷⁾との口上書を匙医師中へ差出した（1850



画像3 下江戸町除痘館の見取り図 滋賀医科大学附属図書館蔵

年11月)。笠原の活動を私利私欲のためとする藩医や城下の人びとに抗うために、笠原は自身に与えられた扶持米の受取りも頑なに拒み続けて私財を投じたため、財政的にも追い詰められていった。

そして何よりも種痘という事業は、それまでの笠原の医師としての経験と並外れた情熱をもってしても困難な、「わが国の医療史上はじめて予防医学の考え方を採用」³⁸⁾した取組みであり、地域社会全体を対象として取り組まない限り十分な効果が得られないものであった。

(2) 除痘館の体制

1851年(嘉永4)8月の目付石原甚十郎の種痘接統掛りへの任命

と、同年10月の下江戸町の除痘館開館は、こうした状況を打開するための福井藩による種痘奨励策であった。組織上、藩医学所に附属するとされた城下北部の下江戸町の除痘館の位置は、**画像1**に「元御預役所、嘉永四辛亥十月廿五日除痘館ニ相成」とあるように、それまで幕府領預役所として使用されていた屋敷地であった。

なお、最初に笠原が種痘を開始した浜町の「仮除痘館」は自宅の隣家で、種痘用に7畳、診察用に4畳、残り14・5畳を痘児等の溜り(控室)としたとされる³⁹⁾。浜町は、北は本町、南は足羽川に面した城下の町人町であるが、この「仮除痘館」の位置を正確に特定することはできていない⁴⁰⁾。

除痘館は、1855年(安政2)年1月には**画像2**のように藩医学所(済世館)に附設することになり、講堂の東側に増築・併設された(3月竣工)⁴¹⁾。医学所の屋敷地は海福雪宅西側であり、入口は北に面しており、1870年(明治3)に医学所が移転した後には橋本左内の弟彦也(綱維)が住んでいた。

石原が種痘接統掛り目付に任命された直後、1851年(嘉永4)8月29日に側用人から出された達書では、「何事も良策一己之物数奇ニ而申立取斗候様ニ心得候哉、何となく不信を抱候様之運びニ相聞候、ケ様之次第ニ而ハ永続も無覚束、万一及絶苗候而者公辺迄も被仰立候御趣意者勿論、御仁恵之思召も相廃れ、且於拙者共も御誕生様被為在候節者、御備ニと見込置候詮も無之様相成不濟事ニ候」とされた。

このように痘苗導入後、2年近くが経過しても種痘を順調に継続できない事態は、藩が笠原の請願を受け幕府に申し立てて痘苗を輸入しようとしたこれまでの経緯はもちろん、藩主慶永の「仁恵」に

も背き、また慶永と熊本藩主細川斉護の娘勇姫との婚姻後「御誕生様」（子の誕生）に備える⁴²⁾ という意味でも、藩として見逃せない事態であった。この段階でようやく藩主導による組織的な除痘館の運営体制づくりが開始されることになる。

石原は、慶永の福井藩襲封直後から小姓として仕え、1846年（弘化3）10月小姓頭取、同年12月目付となり、婚姻御用掛りから種痘掛りとなった。

種痘担当目付としての在任期間は1年未満と短かったが、その後の履歴をみるならば、すぐあと1852年（嘉永5）6月広敷用人、56年（安政3）5月広敷用人そのまま藩の勘定方を掌る「御奉行」として慶永隠居・処罰後の家督相続掛り、開港地横浜警護の拠点太田陣屋普請御用掛り等、藩政上の要職を歴任した人物であった⁴³⁾。中根雪江は、石原が目付に任命されたことによって、「世間公の御行政の御志益堅確なるに服し、執法の厳格なるを畏憚」したとし、種痘に関連しても「良策の精励を賛成せしハ、甚十郎勇邁強忍の力最多し」⁴⁴⁾ と評している。こうした点から、それまで種痘に直接関わる事がなかった多数の藩医・町医を組み込んだ新たな運営体制は、石原が主導したものと考えて間違いないだろう。

表2 藩営種痘館の運営体制

掛り・出席割当 (1851年(嘉永4)10月)	医師名等	「除痘館手続書」 出席割当 (会日)
目付	石原甚十郎	1
総管 [毎会1名宛] 診察方兼任	岩佐玄珪・田代万貞・勝沢一順 細井玄養・橋本彦也	1
総管助 [毎会2名宛]	舟岡周斎・有賀元哲・山脇元恭 内海桃仙	1 締め方1
総管書記 [毎会2名宛]	真下宗円・三崎宗庵 岡部高伯・馬淵玄竜・細井仲斎 辻岡東庵・岩佐又玄・勝沢一直 花木馨助・本山春庵・佐々木悌全 山本良伯・三崎宗仙・本山城益	10
鑑定・種痘方 [毎会1名宛]	笠原良策・三崎玉雲・山本宗平 大岩主一	鑑定方7
種痘方 [毎会出席]	上田万順	種痘方10
種痘方 [毎会3名宛]	宮永良丹・井上杏庵・井上一庵 大岩本立・梯民也・梶井養宅	
種痘方手伝 一番 [毎会3名宛]	平野良察・田代道玄・千種宗伯 吉田仙格・栗崎道伯・内海孝順 内海元策・細井元樹	手伝方10
種痘方手伝 二番 [毎会3名宛]	引間玄泰・浅野恭斎・針谷玄春 前波道巴・片山泰造・有賀義軒 細井春道・妻木謙叔	
種痘方手伝 一ノ側 [毎会1名宛]	大月斎庵・三崎英順・原道達 高井雄作・石田一恵	
種痘方手伝 二ノ側 [毎会1名宛]	玉邑東斎・大月俊助・山田道意 高桑道淳・石田一作	11
応接方 [毎会3名宛]	若栗禎順・木下隆伯・山田道忠 寛昇助・英悌蔵・近藤玄真 藤沢一斎・上田泰助・大島清順 原友斎・石塚泰輔・早見昇造 井上養玄・前川三敬	
—	—	蒸湿方2
小算	下村林左衛門・清水茂左衛門 三輪孫右衛門・大橋文五右衛門 木下悦蔵・平田多三郎 二見源八	勘定役1 勘定方書役1 目付組2 小遣5 門番2

注)「白神往来留 第七」『白神記一白神往来留一』福井県医師会、1997年、pp.163-165、「越ノ前州 除痘館手続書」滋賀医科大学附属図書館蔵による。■は、町医。

除痘館開館に先立つ10月2日に運営を任された総医師数は74名に上った（表2）。藩医40名（父子

を含む)に対して、総管・同助・同書記・種痘方・診察方・種痘方手伝等が割り当てられ、出席割当が示された。これは、佐藤適斎ら江戸に常住した者を除く、在国のほぼすべての藩医に当たる。

これに対して、笠原のもとでそれまで種痘に従事してきた三崎玉雲・大岩主一ら10名の町医については鑑定並種痘方・種痘方が、それ以外の大月斎庵ら24名の町医には種痘方手伝・応接方が割り当てられ、それぞれの出席割当が定められた⁴⁵⁾。城下の町医総数は、1868年(明治元)で57名を数え、除痘館出席が割り当てられたのはその6割にあたる。

家中にあてては、未痘児の姓名、生年月日を調査し目付まで提出すべき旨布達された(1851年9月)。また村方に対しては、郡奉行を通じて、一切謝礼は不要なので除痘館へ未痘の子どもを召し連れるよう触れられたが、これには未痘児の調査は含まれていない(同年11月)。

興味深いことに、下江戸町の除痘館見取図およびその運営のあり様を知ることができる資料が、彦根藩医の資料群の中に残されている。これはすでに海原亮氏が紹介しているもので、種痘を実施することがなかった彦根藩において河村家は、「自ら実践した形跡こそないが、種痘法に関心を示し」「牛痘所図面」「南越除痘館良法伝來說」⁴⁶⁾「越ノ前州 除痘館手続書」(以下、「手続書」と略)の3点を筆写していた⁴⁷⁾。

このうち「牛痘所図面」(画像3)は、左上部分に「御目附・総管詰処」が描かれ、門が南に面していることから、下江戸町の除痘館を描いたものであることがわかる。「長屋門、凡十五間計」「畳数百畳余」とする笠原の記録⁴⁸⁾ともよく合致する。

(3) 除痘館の運営

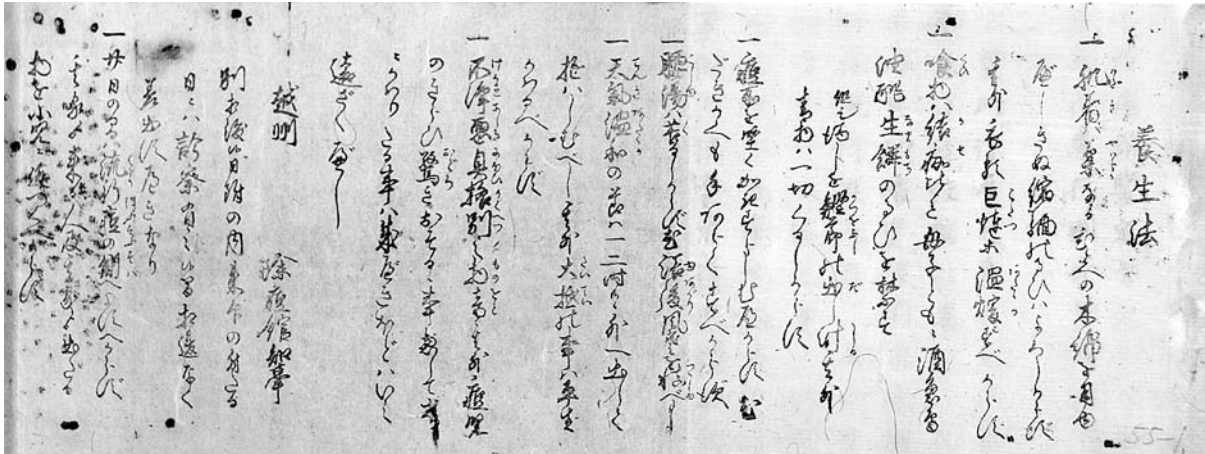
「手続書」は、除痘館に集まる多数の子どもたちに、混乱なく種痘を施し善感まで導くための詳細な運営マニュアルである。その概要をみていこう。

除痘館は暁7ツ時(午前4時頃)に開門、総管以下の医師たちは6ツ時(午前6時頃)に登館する。子どもたちは、はじめて種痘を行う子ども(甲)と、種痘後7日目の子ども(乙)、10日目以降の子ども(丙)に分けられ、玄関で番付札をもらった後、甲印の子どもはその姓名・男女別・年齢・住所・日付等を「甲印着番帳」に記録される。さらに同内容の切手が作成され、この切手と着番帳に割印を押して、切手を「上」の診察所へ提出し、子どもは惣溜りの間へ導かれる。

「痘母」となる乙印の子どもは、同様に着番留方が姓名・男女別・年齢等を記録し、切手を受け取ってこれを「中」の診察所に提出し、「痘母溜」の間に誘導される。丙印の子どもも同様な手続きで「下」の診察所へ誘導される。

「上」の診察所では、総管・同助・鑑定方と書記3名が着席。順番にしたがって甲印の子どもを呼び出し診察後、肌の質に応じて摩擦や蒸湿を施し、種痘の顆数を決め切手に記入。姓名・顆数・順番等を塗札に記して種痘所へ渡す。あわせて種痘記録である「博濟録」⁴⁹⁾にも記入する。そして再診日を記した切手を子どもの介抱人に渡し、この切手をもって必ず再診日の朝6ツ時に登館すべきことを丁寧に命じる。この時にあわせて「養生書」を手渡し、保護・食禁、天然痘患者に近づかないことなどが諭される。

この「養生書」については、笠原の資料群の中に木版の「養生法」が残されている(画像4)。肌



画像 4 養生法 福井市立郷土歴史博物館蔵

着は柔らかな木綿を用い、暖かにしすぎない、痘所をかきむしらない、20日の間は天然痘患者の側に寄らないなど、その内容からこの「手続書」に記された「養生書」、あるいはそれ以前から笠原が作成していた保護者向けの刷り物と考えられる。藩営除痘館開設時に笠原が寄付した物品の中には「養生書 版木二枚」（旧板と改訂板）が含まれていた。

種痘所は5か所に分かれ、1か所ごとに種痘方2・書記1・手伝2名が対応する。痘母の姓名等、摩擦・蒸湿の有無、種痘方の姓名、種処の浅深・位置のようすを草稿に記録し、清書方が「博済録」に記す。接種後の子どもは針痕を乾かすために炉辺へ座らせ、鑑定方が種処を改めた上で「帰り札」を渡す。

「中」の診察所では、乙印の子どもをおよそ10人ずつ順番に呼び出し、切手と「博済録」を照合して初日の顆数等記録をみて鑑定方が診察の上、痘の形様を細録する。このうち痘母となるべき子どもの姓名を手札に写し、鑑定方に送る。痘母は再び痘母溜りへ導かれる（この段階で不感者には再接種を案内）。

丙印の子どもで、16日以後に痘が正常に結痂した者には「博済録」に「功成」（善感）の印を押し、以後登館の必要がないことを告げ、「帰り札」を渡す。つまり善感を確認するまでに最低でも3度来診することになる。

このように「手続書」においては、藩営除痘館での診察・接種から善感までの流れが、それぞれの医師や諸役人の役割とともに詳細に定められていた。とくに接種記録である「博済録」の作成によって個々の子どもの接種経過が詳細に記録されていたことは注目すべきである。「博済録」は、早い段階から作成され、藩営除痘館開設の際には五巻が引き継がれた。このため「博済録」の用紙は木版で印刷され、子どもの姓名の頭文字による索引が作成されていた。

また幅広い階層の子どもを手際よく誘導するために、色分けされた旗や襷が用いられたことも興味深い。種痘を受ける甲印の子どもは黄色の旗が掲げられ、甲印の子どもにも黄色の襷が掛けられた。これに対して乙印の痘母の控室には赤い旗、そして子どもには赤色の襷といった具合である。

絶苗を避けるためには、藩による強制力が発揮された。風雨や火災などの災害、盛夏と厳冬・年末年始時に備えて、町奉行の命令で町方各組から12人の未痘児を差出すこととされ、彼らは番外として

迅速に接種を受けることができた。また門番を配置して「帰り札」がない者がみだりに門を出ることを防いだ。再診日に登館せず「功成」の印がない者には追跡調査が行われ、子どもを呼びだして痘痕を検査し、再接種が必要な者には「寒暖中和の気候」を選んで命じるとされている。

それでは、この「手続書」はいつ頃に作成されたものだろうか。

「手続書」に記載された痘児惣溜り、痘母溜、上・中・下の診察所、種痘の間、蒸湿間、炉などは、**画像4**の見取図とよく照合している。笠原の記録によれば、1852年（嘉永5）9月頃、天然痘が大流行し除痘館前には早朝から100人から200人ほどが群集したという⁵⁰⁾。「手続書」に記載された切手の書式には1日・4日・7日・10日・13日・16日・19日・22日の日付があり、多い時には7日ごとの種痘を2サイクルで行うことが想定されていた。笠原がこの大流行時に板刻したとする「博濟録」の書式⁵¹⁾は、「手続書」に記載されたものとほぼ同内容である。また同年12月28日には「町奉行々、其支配下貧窮之者二、銀三拾匁ツ、被下候而、一組ニ一人ツ、凡十二人出ル」（1月5日には、20匁ずつ）とあり、金銭を渡していることを除いてこれも「手続書」によく合致している。

反面、笠原が記録している切手の書式には甲・乙・丙印、住所、姓名、男女、年齢はなく、「手続書」の切手のそれとはかなり異なっている。

さらに**表2**でみるように、藩営除痘館の開館当初（1851年10月）段階での医師の出席割当と、「手続書」における出席割当を比較すると、総管書記、鑑定方、種痘方、手伝方、応接方の医師数で、「手続書」の方が明らかに拡充されていることがわかる。

このことから、すくなくとも「手続書」は1852年の天然痘大流行時に接種者が爆発的に増えた際の経験を踏まえ、その後年にさらに改善を加えて作成されたマニュアルとみていいだろう。「手続書」からは福井藩の種痘の拠点となった除痘館の組織的できめ細かい運営のあり様が浮かびあがってくる。

3. 種痘関係医師等への褒賞

前述のように福井藩の種痘奨励を推進したのは、石原甚十郎をはじめとする5名の目付であった。福井藩における目付は「執法官にて番士より人撰拜命、国政枢機に関し上は家老職より下は荒子^{あらしこ}に至るまで褒貶・黜陟を掌る」とされ6名が置かれた⁵²⁾。このように目付は藩政の監察や人事評価に関わる役職であり、佐賀藩や長州藩において痘苗導入直後にそれぞれ引痘方、引痘掛が蘭方を中心とする藩医に命じられた点⁵³⁾と比較すると、福井藩の特異さが際立つ。痘苗導入から2年後まで藩の積極的な関与が遅れ、その後も少なくとも56年（安政3）頃まで続く藩医と町医の対立（**表1**、1856年5月触書）が、種痘掛りを監察と人事評価を業務とする目付に担当させざるをえない背景となったと考えられる。同時に目付が種痘に関与することにより、後述するような有能な蘭方町医の登用にもつながっていった。

目付による評価の記録でもある藩履歴資料から、種痘に関わった褒賞あるいは任免の記述がある医師・役人をまとめたものが文末の**表4**である。「出精」「心配行届」といった定型的な表現からは種痘への具体的な関わり方はわからないものの、明治初年まで約20年間にわたって種痘事業に一定程度積極的にかかわった医師名がわかる。ただ藩側の記録であり、町医については次に述べるような欠落があることは留意する必要がある。

表3 目付による褒賞等事例数

年	1851	52	53	54	55	56	57	58	59	1860	61	62	63	64	65	66
目付種痘掛り	石原	海 福			小宮山	出 淵				市 村						
褒賞等事例数	2	24	0	9	1	9	8	17 (10)	19 (12)	7	13 (6)	7 (2)	37 (24)	0	25 (9)	17 (5)

注) 事例数には任免関連の事項を含む。() 内は町医。1852年には「御叱(呵)」が2、57年には「押込」2が含まれる。

事例数を年ごとにみると(表3)、1851年(嘉永4)10月の最初の褒賞は鑑定方を務めた藩医上田耕輔および引間正順のみであるが、笠原の記録では笠原良策・三崎玉雲・山本宗平・大岩主一ら町医19名もこの時に褒賞を受けていた⁵⁴⁾。翌52年(嘉永5)年年末には、除痘館開館時の総管・書記・種痘方手伝等の中から藩医22名が褒賞を受け、この中の栗崎悦也・山脇立樹は、当番皆勤のうへ「数十度」出勤した年もあり、度々褒賞を重ねている。一方、2名が「出席等閑」でお叱りとなった。この年についても前年と同様に10名の町医が褒賞⁵⁵⁾を受けているが、これも記載されていない。

町医への褒賞が藩の記録に表れてくるのは1858年(安政5)からであり、その貢献度に応じて50匁から200匁が下された。彼らの中には、慶応から明治初年まで積極的に種痘に従事する梶井養順・高井見竜・細田竜淵・加藤桂寿・石塚泰輔らが含まれ、割り当てられた当番を皆勤のうへ「数十度」出勤した年があった。町医への褒賞の割合がもっとも多かったのは1863年(文久3)で、37名中24名が町医であった。そのほとんどが痘苗導入当初の笠原社中には含まれない町医たちで、この頃には除痘館の担い手として町医が広く関わっていたことがわかる。

これに関連して種痘に従事した町医の登用が目玉を引く。三崎玉雲(道生)は1856年(安政3)に表医師となり、大岩主一は58年から江戸詰として謹慎中の松平春嶽に仕え(60年から匙医師同様)、大岩円(本立)は62年(文久2)表医師に召し出された。これ以降も高井見竜が62年に匙医師取扱、梶井養順・加藤桂寿・石塚泰輔・吉田良輔が65年(慶応元)御目見医師、笠原浜人(健蔵)は69年(明治2)医業生に、それぞれ任ぜられた。笠原自身は、1860年(万延元)には内願によって休息を仰せ付けられ、御目見医師と一代限り帯刀が許された(62年年来医業に厚く心懸けたとして合力米10俵、66年に種痘等の功績により合力米10俵、都合20表ずつ年々下付)⁵⁶⁾。

全体を通して慶応期に至るまで、「除痘館皆勤」「除痘館当番致皆勤」といった表現で褒詞が継続されていることから、藩の種痘事業の拠点は一貫して城下の除痘館にあったと考えられる。

おわりに

目付による種痘関係医師・役人の褒賞は、1866年(慶応2)12月を最後に、除痘館開設以来年数が経過したことを理由に停止となった⁵⁷⁾。さらに69年(明治2)6月には、種痘に関する藩費支出も、貧窮者を除いて廃止された⁵⁸⁾(表1)。その後70年2月には、医学所・種痘所(除痘館は前年に種痘所と改称)は、西本願寺掛所に開設された病院に合併され、種痘は病院種痘方によって担われることになる⁵⁹⁾。

これまでみてきたように、福井藩では1851年(嘉永4)の藩営除痘館の開設を画期に、当初70名を

超える藩医・町医を組織し、その後の天然痘流行時にはそれを超える体制で、絶苗を回避しつつ接種から善感に至るまでの詳細な運営マニュアル「手続書」と、個々の子どもの接種経過を記録する「博濟録」を整備しながら組織的な運営を行っていた。

この除痘館を拠点に領内へ出張種痘をする試みは、伴氏が明らかにしたように、1855年（安政2）に城下から離れた越前海岸の蒲生浦（5回）・小丹生浦（2回）に対して行われた。これは、笠原が除痘館掛り目付の海福猪兵衛と郡奉行岡田喜八郎の支援を受けて実施した先進的な取組みではあったが、多額の赤字を生み、継続することはできなかった⁶⁰⁾。

長州藩の場合では、萩の種痘所が軌道に乗るとすぐに郡部での種痘実施が検討され、1850年（嘉永3）2月から種痘所で郡ごとに選抜された医師に対して実技伝習が開始された⁶¹⁾。福井藩においては、52年2月に笠原に藩医ら10名に対する実技指導を命じていたものの、こうした郡部への種痘実施を想定した集中的な実技伝習は確認できない。

ただ安政期以降の種痘の実態について、断片的な記述ではあるが城下近郊、坂井郡二日市村の豪農層の日記の中に1865年（慶応元）に除痘館と三国で同時期に種痘を受けた記録⁶²⁾が見出せる。その内容は次のとおりである。

(3月)
廿八日 およき・おきよ・下女政・供くミメ四人除痘ニ行、大工藤兵衛へ行泊り、大工藤兵衛へ銀拾匁、白さと箱一持行

廿九日 夕方帰村、今日除痘日

(中略)

四月〔^(4日)〕 三国江佐太郎、喜兵衛ニ被負、除痘ニ行キ嶋加藤へ着

(中略)

六日 除痘種取ニおよき・お政・下女くミ三人出福、与力町大工藤兵衛方へ行き、但およきおばなり、除痘仮名^(およき)おきよハ桑野嘉五吉娘、お政は狛帯刀殿内松山佐左衛門娘、おきよは風邪ニ付不参、医学所除痘大込ニ付家中□名致し申候、右二軒共大工藤兵衛一家なり

(中略)

十日 佐太郎、喜兵衛ト三国除痘水取ニ行野中へ寄晩方帰村、三国除痘札拾匁嶋加藤へ喜兵衛へ渡す

この日記は、1865年（慶応元）3月末から4月上旬にかけて、女兒3名と男児1名が種痘を受けた事例である。女兒3名は「除痘日」の前日に城下の親戚に宿泊し3月29日除痘館で種痘を受け、7日目の4月6日再度除痘館へ出かけ痘母として「種取」を行った（1名は風邪で不参）。これに対して、男児は4月4日（痘母となった10日から逆算して推定）に三国で種痘を受け、10日に再び三国へ行き、「除痘札」に10匁を支払っていた。一方、除痘館で接種を受けた女兒たちについては、こうした謝礼の支払いに関わる記述は見あたらない。また「種取」「水取」等の口語的な表現から、種痘の一定の広がりを見ることができる。

この日記から1865年（慶応元）には、除痘館のみならず除痘日に種痘を行う拠点が三国にも存在し、日記筆者のような支払いが可能な層には謝礼が求められたことがわかる。さらにその叙述から、拠点ごとに男女別に分けられていた可能性がある。三国において種痘を実施した可能性のある施設として

は、「思誠館」がある。これは三国湊の豪商有志によって町医多賀谷貞策宅に設立された期文館を改称したもので、65年5月の「三国鑑」には、「思誠館 幼童習学之ために設ク、貧民施療并種痘モ爰ニ於テス」⁶³⁾とある

また府中本多家では、1855年（安政2）に仮医学所に除痘館が併設され、65年（元治2）ごろには近在の村々に対しても未痘児の把握を進めたことがあきらかになっている⁶⁴⁾。

さらに視線を近代に向けるならば、福井県内において種痘接種率が80%を超えるのは明治20年代後半になってからであった（図2）。その際にも不善感となる率は2割から5割とかなり高く、鑑定と再接種の必要性とともに種痘事業の道のりの遠さを知らされる。

本稿では、幕末の20年間を通して福井藩における種痘事業の展開を捉えることを主眼としたため、領内の三国・金津・府中の動向や大野・鯖江等の他藩とのかかわりを十分検討できていない。今後は、安政期に橋本左内が主導した医学所改革と種痘事業との関連、種痘の実態を解明するためのさらなる関係医師の資料群の掘りおこし、日記等に記録された種痘事例の収集が課題である。

〔付記〕本稿の作成にあたり、青木歳幸氏、本川幹男氏、廣川和花氏、長野栄俊氏に御教示いただいた。

注

- 1) 福井県文書館の資料管理番号は以下のとおり。松平文庫資料群番号 A0143、「士族」資料番号00485～00490、「剥札」00469～00470、「士族略履歴」00471～00482、「子弟輩」01095～01097、「元陪臣」01038～01039。士分以上の藩士の履歴「士族」「剥札」については、福井県文書館資料叢書9～14『福井藩士履歴』1～6として既刊。
- 2) 「雑類」（松平文庫 A0143-01183）。
- 3) 伴五十嗣郎「笠原白翁の種痘普及活動（Ⅰ）—安政元年以降の村次伝苗を中心として—」『実学史研究Ⅱ』1985年、p.150。
- 4) 笹岡芳名『越藩福井医史及医人伝』〔私家版〕1921年。山崎佐「福井藩種痘の由来（1）（2）—笠原良策のこと—」『日本医師会雑誌』43巻8号・43巻9号、1960年、竹内真一「福井藩種痘の伝来及び普及」『若越郷土研究』8巻4号、1963年、竹内真一「京都牛痘伝苗の日時及び同痘苗の由来について—笠原文書を中心にして—」『医譚』復刊47号、1975年、伴五十嗣郎「笠原白翁の種痘普及活動（Ⅰ）（Ⅱ）—安政元年以降の村次伝苗を中心として—」『実学史研究Ⅱ・Ⅲ』、1985・1986年。

これに対して、海原亮『江戸時代の医師修業—学問・学統・遊学—』2014年では、彦根藩医が残した資料を用いて、福井藩除痘館の徹底した痘児管理のようすを明らかにしている。

- 5) 以下の笠原良策の記録は、笠原が作成・収受したい書簡や願書類の控えて、「白神痘用往来 第二」「白神痘御用

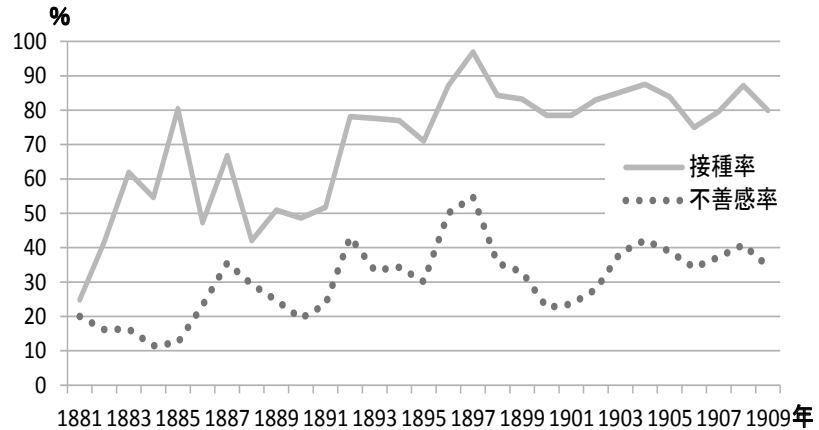


図2 福井県における種痘の接種率・不善感率（1881～1909年）
第103表 種痘（1881-1909年）『福井県史』資料編17 統計、2003年による。

留 第三」「白神痘御用留 第四」「白神御用留 第五」「白神用往来留 第六」「白神往来留 第七」「白神往来留 第八」「白神記 第九」（いずれも福井市立郷土歴史博物館蔵）からなっている。『白神記—白神往来留—』福井県医師会、1997年において全文が翻刻されている。以下同書からの引用は、筆者が原本校合し、一部文字・用字等を修正したものである。「白神痘用往来 第二」「白神痘御用留 第三」については、『福井市史』資料編 9、1994年にも翻刻されている。

- 6) 佐賀藩江戸藩邸への伝苗は、伊東玄朴の書状から鍋島直正の江戸出府より早い10月2日とされている（青木歳幸『佐賀偉人伝13 伊東玄朴』2014年、p.75）。
- 7) 長崎の唐通詞頼川四郎八が京都の日野鼎哉へ牛痘癩を送ったのが嘉永2年9月7日で、おおよそ12日ほどで京都に到着したと考えられる。大坂の緒方洪庵らへの分苗が同年11月7日（西暦12月21日）であった（アン・ジャネット、廣川和花・木曾明子訳『種痘伝来—日本の〈開国〉と知の国際ネットワーク—』2013年、pp.147-163）。
- 8) 京都からの福井への伝苗の際には、笠原は絶苗を恐れ「京師已来、十六日下苗ノ兒と十九日下苗之兒と二通ニ仕置候故、七日ノ間ニ二会仕候」と記しており、念のために2サイクルで種痘を実施していた（『白神記』p.23）。
- 9) 福井市立郷土歴史博物館史料叢書6『笠原白翁筆 戦兢録』1989年。
- 10) 『白神記』p.57、「除痘館誓約」『福井市史』資料編 9、1994年、pp.274-276。
- 11) 半井仲庵は、中川修亭に学んだ蘭方医で、松平慶永の襲封以来たびたび参勤に同行し江戸詰めを務めた。笠原の種痘事業をよく理解し、『白神記』には笠原に対する的確な助言や励ましを含んだ多くの書状が残る。
- 12) 笠原は、12月16日付の半井元冲宛（在江戸）の書状で「在京中一日も早く御地痘苗差上候て、御屋敷（引用者注：福井藩江戸屋敷）より弘り候用仕度奉存候得共、色々無拋義有之不能其義、此段残念難忘」と記している（『白神記』p.36、山崎佐「福井藩種痘の由来（2）—笠原良策のこと—」『日本医師会雑誌』43巻9号、1960年）。
なお、これも山崎佐氏が指摘しているが、この時半井は帰国予定であった佐久間象山に伝苗している。半井は「向後信州ハ勿論其他近国迄も逐々伝播候様、急度相約申候」としているが、佐久間は前年に生まれた次男に試み、知人に接種したものの、領内一統への種痘を建言したが実現しなかったとされている（『象山全集』上巻、1913年、p.30）。
さらに、松平慶永と勇姫との間の最初の子である安姫は、生後5か月を過ぎた1861年（万延2）2月3日、坪井信良が担当し半井仲庵が補助して種痘を受けた（「御側向頭取御用日記」松平文庫 A0143-00513）。
- 13) 「笠原白翁嘆願書」『福井市史』資料編 9、1994年、p.287。
- 14) 朝倉氏に由緒をもち城下町医の中で格別の家格にあった三崎玉雲は、早世した養子専蔵が日野鼎哉に入門していた経緯から、笠原良策の種痘事業を理解し、積極的に支えた（久角健二「三崎専蔵の京都遊学をめぐって—三崎玉雲家と福井の種痘事業—」『ふくいミュージアム』No.50、2015年）。
- 15) 大岩主一（1810～1862年）は、加賀大聖寺藩の生駒玄竜、京都の小石元瑞・新宮凉庭・日野鼎哉に学んだ蘭方医。1859年（安政6）から、江戸霊岸嶋中屋敷で謹慎中の松平春嶽に仕えた（福井県文書館資料叢書9『福井藩士履歴』1、2013年、pp.136-137）。
- 16) 笠原元蔵については、1872年段階で27歳であった次男純一とは考えられず、不明（石橋重吉『幕末維新福井名流戸籍調』1942年）。
- 17) いずれも緒方洪庵の適塾で学んだ宮永良山（勤斎・欽哉）・実吉（高桑実）・典常3兄弟の父（石橋重吉『若越新文化史』復刻版、1978年、p.57）。なお、高桑実は、坪井信良・緒方洪庵に学んだ蘭方医で、禁門の変、長州征討、戊辰戦争に従軍した。1869年（明治2）から医学所訓導種痘所掛りを務め、90年に設立された「福井県医学会」を主導した医師のひとりで、第1回医学会において「医事沿革一般」を講演した（福田源三郎『越前人物志』中巻、1910年、『第一回福井県医学会報告』1890年）。
- 18) 山本宗平は、1857年（安政4）の医学所「御改正」後に漢家として助教を務めたが、詳細は不明（海原亮『近世医療の社会史—知識・技術・情報—』2007年）。
- 19) 『白神記』pp.19-20・p.38。
- 20) 半井元冲宛書状（『白神記』p.35）。
- 21) 伴五十嗣郎「笠原白翁の種痘普及活動（I）—安政元年以降の村次伝苗を中心として—」『実学史研究Ⅱ』1985

- 年、p.163。
- 22) 『白神記』 p.19。
 - 23) 1850年（嘉永 3） 2 月21日の半井元冲宛書状（『白神記』 pp.59-60）。
 - 24) 福井県文書館資料叢書 5『越前松平家譜 慶永 2』 2010年、p.168。
 - 25) 『白神記』 p.64。
 - 26) 『白神記』 p.61。
 - 27) 緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室『緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く』 2015年、p.31。
 - 28) 『白神記』 p.129。
 - 29) 『白神記』 p.104。
 - 30) 『白神記』 p.134。
 - 31) 『白神記』 pp.140-141。
 - 32) 『白神記』 p.142。
 - 33) 『白神記』 pp.142-143。
 - 34) 伴五十嗣郎「笠原白翁の種痘普及活動（Ⅰ）—安政元年以降の村次伝苗を中心として—」『実学史研究Ⅱ』 1985年、p.166。
 - 35) 『白神記』 p.129。
 - 36) 「笠原白翁嘆願書」『福井市史』 資料編 9、1994年、p.286。
 - 37) 『白神記』 p.134。
 - 38) 海原亮『江戸時代の医師修業—学問・学統・遊学—』 2014年、p.209。
 - 39) 『白神記』 p.35。
 - 40) 1881年（明治14） 5 月の寺島知義による「[[御城下之図]]」（松平文庫 A0143-21342）には、養子の笠原健造（健藏）の家が足羽川沿いの木蔵横に描かれているが、これは安政元年の火災後に移転した後の屋敷地で、1872年（明治 5）の戸籍の所在地浜町第805番にあたると考えられる（石橋重吉『幕末維新福井名流戸籍調』 1942年）。
 - 41) 「医学所規則」『若越医学史展』 展示資料 1（福井県立図書館移管文書 A0204-00376）。
 - 42) 痘苗の福井到着と同じ1849年（嘉永 2） 11月、藩主松平慶永と熊本藩主細川斉護の娘勇姫との婚姻が整い、勇姫の輿入が行われた（福井県文書館資料叢書 5『越前松平家譜 慶永 2』 2010年、p.161）。
 - 43) 福井県文書館資料叢書9『福井藩士履歴』 1、2013年、pp.168-170。
 - 44) 中根雪江『奉答紀事』 1980年、p.81・ p.134。
 - 45) 『白神記』 pp.163-165。
 - 46) 「南越除痘館良法伝來說」は、痘苗の伝来から1853年（嘉永 6） 夏までの種痘普及過程の概略を記し、約 4 年間で6,595人に種痘を行ったとしている。本文中に「今年癸丑」の表現があることから1853年に書かれたものとみていいだろう。用字は若干異なるが、越前史料にもほぼ同文の影写「南越除痘館良法伝來說」があり、採訪先は白井光太郎である。
 - 47) 滋賀医科大学附属図書館蔵、「河村文庫画像データベース」では福井藩種痘関連の 3 点の画像が公開されている。海原亮『江戸時代の医師修業—学問・学統・遊学—』 2014年。
 - 48) 『白神記』 pp.161-162。
 - 49) 「博施濟衆」（広く民に恩恵を与え、苦しみから救済すること）から由来しているか。
 - 50) 『白神記』 p.195。
 - 51) 『白神記』 pp.195-196。
 - 52) 鈴木準道・舟沢茂樹校訂『福井藩史事典』 1977年、p.52。
 - 53) 青木歳幸「佐賀藩の種痘」、小川亜弥子「長州藩の医学館と種痘」 青木歳幸・大島明秀・W・ミヒエル編『天然痘との闘い—九州の種痘—』 2018年、p.127・ p.174。
 - 54) 『白神記』 pp.171-172。
 - 55) 『白神記』 p.193。

- 56) 「雑類」(松平文庫 A0143-01183)。なお、1873年(明治6)に笠原自身が県に提出した「笠原白翁履歴」(越前史料)では、70年孝顕寺病院医長介兼主務役、72年文部省種痘免許。
- 57) 「一、十二月十七日左之通御ヒ医師江申聞候様御中老江書付を以御家老申渡之、種痘之儀、格別御仁恵を以先年御派立以来除痘館出精之御医師并町医共、年々御褒詞被成下候得共、年数も相立候事故以後年々御褒詞之儀ハ被相止候」 「茂昭家譜」(松平文庫 A0143-01986)、福井県文書館「幕末福井関連資料データ」の「越前世譜 茂昭様御代 データセット」による。
- 58) 「種痘之儀嘉永年中御施行相成候以来、御封内上下治蒙御仁恵候処年数も相立候儀ニ付、官府御賄ハ被相止候間已後、種痘相願候者存寄次第酬料可指出筈ニ候尤貧窮之者ハ不及其儀御賄可被成下旨被仰出候事」 「茂昭家譜」(松平文庫 A0143-01989)、福井県文書館「幕末福井関連資料データ」の「越前世譜 茂昭様御代 データセット」による。
- 59) 『稿本福井市史』下巻、1941年、pp.859-861。さらに後年のことになるが、福井市医師会の前身にあたる済世会は、同会館「済世館」を新築した1887年(明治20)以降96年まで、この会館で春秋二季、種痘接種を実施した。この間毎年110円以上の痘苗を用い貧窮者には無料で実施した。94年4月には、会館で仔牛を飼育し牛痘苗を製造したが、東京で痘苗製造所が開設されたために、97年から痘苗製造および接種を中止した(『済世館小史』復刻版、1971年)。
- 60) 伴五十嗣郎「笠原白翁の種痘普及活動(Ⅱ)―安政元年以降の村次伝苗を中心として―」 『実学史研究Ⅲ』1986年、pp.151-194。ここでは、蒲生・小丹生浦への出張種痘は「強力な藩の威光のもと強制種痘の方法をとって、適宜次回の出張村落を決定することが出来れば」急速に藩内全域へ種痘が普及したはずであったが、「実際には藩医達の組織的な協力が得られず、白翁と四、五名の町医師が、家業を余所に十分な手当もなく、相も変らぬ誹謗や中傷を受けながら、細々と実施しなければならなかった」ことを「福井藩種痘の特質」と結論づけている。
- これまで述べてきたように、こうした状況は1851年(嘉永4)の藩営除痘館開設までの特徴であり、福井藩種痘事業の特徴とみることはできない。さらに上記のような強制種痘を藩が実施することは、当時の民政のあり様から、また福井藩の財政からも困難だったといわざるをえない。越前では忠直改易の以降に複数の藩が成立しその後幕府領や旗本領も置かれたため、きわめて錯綜した所領配置になっていたことが、村次で種痘を行う上で大きな制約となったと考えられる。
- 61) 伝習許可が下りた医師は、1851年3月までに109名にのぼったという(小川亜弥子「長州藩における牛痘種痘法の導入と普及」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第116集、2004年)。
- 62) 「元治二乙丑年日記」加藤竹雄家文書 A0052-01419。
- 63) 1865年(慶応元)5月の「三国鑑」は坂井市みくに龍翔館蔵。平野俊幸氏の御教示による。
- 64) 海原亮『近世医療の社会史―知識・技術・情報―』2007年、pp.160-163、同『江戸時代の医師修業―学問・学統・遊学―』2014年、pp.207-208。
- 65) 「第103表 種痘(1881-1909年)」 『福井県史』資料編17 統計、2003年。

表4 種痘に関わって褒賞・任免等を受けた医師・役人

No.	氏 名	出 典	業務・修行先等	関連業務等
1	石原甚十郎（平右衛門・左金太）	剥札	150石・目付	[1851 嘉永4.08] 種痘接続之儀ニ付右掛り（-52.06）
2	上田耕輔（万順・杏庵）	士族	奥医師 鍼医師	[1851 嘉永4.10] 種痘御端立之節格別致出精太儀思召 [1852 嘉永5.12] 種痘格別致出精候ニ付、鑑定方勤中 三人扶持御足 [1860 万延1.12] 除痘館当番皆勤 [1869 明治2.08] 除痘館預り（-.12）
3	引間正順（元泰）	剥札	表医師 奥医師 匙医師	[1851 嘉永4.13] 種痘御端立之節度々致出席太義ニ思召 [1852 嘉永5.12] 除痘館出席等閑之趣相聞候ニ御叱り（- 同月御免） [1861 文久1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞
4	河部鉄次郎	新番格以下	小算格	[1852 嘉永5.01] 御勘定所勤被仰付、月勘定方助除痘館掛り江
5	海福猪兵衛（岩之丞・意閑・南岡）	剥札	200石・目付	[1852 嘉永5.06] 除痘館掛り（-55.08）
6	前波淡平（道巴・巴）	士族	表医師 鍼医師 奥医師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段、達御聴太儀思召 [1856 安政3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤其余番外数度致出勤候ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 除痘館皆勤御褒詞
7	加藤道庵（周益・北叟）	剥札	表医師・奥医師 匙医師	[1852 嘉永5.12] 種痘御端立、以来心配行届候趣相聞候ニ付、帯地一被下置候
8	田代万貞（宗愿・万悌）	剥札	奥医師・匙医師	[1852 嘉永5.12] 種痘御端立以来心配行届候趣相聞候ニ付、帯地一被下置候
9	岩佐玄珪（源助）	剥札	表御医師并 御針医師兼帯 奥医師・匙医師	[1852 嘉永5.12] 種痘御端立以来心配行届候趣相聞候ニ付、帯地一被下置候
10	細井玄養	剥札	表医師・奥医師 匙医師	[1852 嘉永5.12] 種痘御端立以来心配行届候趣相聞候ニ付、帯地一被下置候
11	半井保（元冲・仲庵）	剥札	匙医師・奥医師 医学館（蘭家）教授	[1852 嘉永5.12] 種痘御端立以来心配行届候趣相聞候ニ付、帯地一被下置候
12	栗崎悦也（道竹・道伯・甚左衛門）	士族	奥外科	[1852 嘉永5.12] 種痘致出精候段、達御聴太儀ニ思召 [1854 安政1.12] 種痘之義格別出精ニ付御褒詞 [1857 安政4.12] 除痘館当番之外数十度致出精候ニ付御褒詞 [1858 安政5.12] 種痘日診察日共定出勤ニ付御褒詞 [1859 安政6.12] 右当番之外数十度致出勤候ニ付御褒詞 [1860 万延1.12] 右同断 [1861 文久1.12] 右同断 [1862 文久2.12] 鑑定方相勤種痘日診察日共定出勤、格別致精勤 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤其余番外数度出勤、格別出精相勤

No.	氏 名	出 典	業務・修行先等	関連業務等
				[1865 慶応1.12] 種痘御端立已来引続格別出精ニ付、銀五枚被下置候 [1866 慶応2.12] 種痘御端立以来引続格別出精相勤候ニ付、年々銀五枚ツ、被下置候
13	山脇立樹（元恭）	士族	奥医師 匙医師格	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀出精致し候段達御聴、太儀ニ思召 [1854 安政1.12] 種痘之義ニ付右同断 [1857 安政4.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1858 安政5.12] 右同断 [1859 安政6.12] 除痘館出席年々致出精、殊ニ世話等行届候ニ付御下緒一掛被下置候 [1860 万延1.12] 除痘館当番皆勤、其上数十度致出勤候ニ付御褒詞 [1862 文久2.12] 種痘御附属以来締り方格別致精勤候ニ付、御帶地并銀壺枚被下置候 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出勤候ニ付御褒 [1869 明治2.05] 除痘館掛り
14	浅野高三（卯吉・恭斎）	剥札	表医師・江戸（修行） 佐倉（繻帯術修行） 裏医師 長崎（佐藤舜海同道）	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段、達御聴太儀被思召 [1854 安政1.12] 種痘之義出精ニ付御褒詞 [1856 安政3.12] 除痘館致皆勤ニ付御褒詞 [1870 明治3.07] 病院廻診方兼種痘懸り被仰付候事
15	榎並孝斎	剥札	奥鍼医師 漢学助句読師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴、太儀ニ思召 [1854 安政1.12] 種痘之義ニ付右同断
16	佐々木一雄（悌全）	剥札	鍼師 匙医師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴、太儀ニ思召 [1857 安政4.12] 除痘館当番致皆勤候段、達御聴太儀ニ思召候、此段申渡候様被仰出候 [1859 明治2.08] 除痘館（種痘所）預り（-.12被免）
17	橋本左内	剥札	表外科・江戸	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀ニ思召
18	山本正（良伯・正伯）	士族	奥目医師 奥医師格 会社二等医製薬所 足羽県病院事務	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀ニ思召 [1854 安政1.12] 種痘之義ニ付御褒詞 [1856 安政3.12] 除痘館当番皆勤候ニ付御褒詞 [1857 安政4.04] 助幹事 [1857 安政4.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1858 安政5.12] 右同断
19	平野誼平（良察・良庵・良右衛門）	士族	表医師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀ニ思召 [1858 安政5.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1859 安政6.12] 右同断 [1860 万延1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1861 文久1.12] 右同断 [1862 文久2.12] 除痘館当番皆勤候ニ付御褒詞
20	細井玄春（仲斎）	剥札	表医師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀ニ思召
21	花木馨助（栄・馨輔）	剥札	儒医・奥医師 表医師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀思召
22	千種繁（宗伯）	士族	表医師 鍼兼帯奥医師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀思召

No.	氏 名	出 典	業務・修行先等	関連業務等
23	針谷恒人（玄春・雲沢）	剥札	表医師・裏医師 佐倉（綱帶術修行、佐藤舜海）	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀思召 [1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞
24	真下宗円（宗朔）	剥札	表医師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀被思召
25	馬淵玄竜	剥札	表医師・奥医師 江戸（家業修行）	[1852 嘉永5.12] 除痘館出席等閑之趣相聞候ニ付御呵（- 同月御免）
26	本山春庵（春益・仙庵）	剥札	奥鍼医師 家従（針治御用）	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀思召
27	辻岡東庵	剥札	表医師・奥医師	[1852 嘉永5.12] 種痘之儀致出精候段達御聴太儀思召
28	本山省也（城益）	士族	奥鍼医師・穴法師	[1854 安政1.12] 種痘之儀出精ニ付御褒詞 [1856 安政3.12] 右当番皆勤ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 除痘館皆勤御褒詞
29	妻木達（元真・敬斎）	剥札	外科	[1854 安政1.12] 種痘之義ニ付御褒詞 [1856 安政3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞
30	益田長庵（真下宗碩）	剥札	表医師	[1854 安政1.12] 種痘之義出精ニ付御褒詞
31	馬淵竜衛（玄仙）	士族	表医師・佐倉（佐藤舜海） 奥医師	[1854 安政1.12] 種痘之義出精ニ付御褒詞 [1856 安政3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞
32	勝沢一順（一応）	剥札	表針医師・奥針医師 赴医師 医学館（漢家）教授	[1855 安政2.03] 種痘御端立以来心配行届候趣相聞候ニ付、帶地一被下置候
33	小宮山周蔵	剥札	100石・目付	[1855 安政2.08] 除痘館掛け（-56.07）
34	出淵伝之丞（勇次郎）	士族	150石・目付	[1856 安政3.07] 除痘館掛け（-60.07）
35	堀 信尹（吉助・権之助）	略履歴	200石	[1857 安政4.04] 出淵伝之丞江戸留守中除痘館掛け
36	千本東岫（藤左衛門）	略履歴	300石	[1858 安政5.01] 出淵伝之丞罷帰候迄除痘館掛け
37	内海桃仙	剥札	表医師・奥医師	[1856 安政3.12] 除痘館当番致皆勤候段、達御聴太儀ニ思召
38	有賀道順（小助・立長・元哲）	剥札	表医師・奥医師	[1856 安政3.12] 除痘館当番致皆勤候段達御聴太儀ニ思召
39	三崎玉雲（道生）	剥札	表医師	[1856 安政3.12] 除痘館皆勤ニ付御褒詞、同四巳、同五同断御褒詞
40	内海孝順	剥札	表医師	[1857 安政4.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1858 安政5.12] 右同断 [1859 安政6.12] 右同断 [1861 文久1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1862 文久2.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞被成下候 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出勤候ニ付御褒詞
41	片山泰造	略履歴	表外科 奥外科	[1857 安政4.12] 除痘館皆勤ニ付御褒詞 [1858 安政5.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1860 万延1.12] 右同断 [1862 文久2.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出勤候ニ付御褒詞
42	久留島勝太郎	新番格以下	小算	[1857 安政4.12] 除痘館役等閑之趣相聞候ニ付押込（- 同月御免）

No.	氏 名	出 典	業務・修行先等	関連業務等
43	杉野初五郎	新番格以下	下代	[1857 安政4.12] 除痘館役前等閑之趣相聞候ニ付押込 (- 同月御免)
44	橋本綱常(破魔五郎・琢磨)	士族	表外科 長崎	[1858 安政5.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1863 文久3.12] 除痘館当番致勤候ニ付御褒詞
45	斎藤策順	雑類	本多丹波方(本 多内蔵助) 御目見医師	[1858 安政5.5] 先年除痘館御端立以来今以皆勤諸事 引受致心配候ニ付江戸往来之節於府中町御目見被仰 付候
46	生駒耕雲	雑類	本多丹波方(本 多内蔵助) 御目見医師	[1858 安政5.5] 先年除痘館御端立以来今以皆勤諸事 引受致心配候ニ付江戸往来之節於府中町御目見被仰 付候
47	渡辺静庵	御国町方 雑類	府中町医	[1858 安政5.5] 先年除痘館御端立以来今以皆勤諸事 引受致心配候ニ付江戸往来之節於府中町御目見被仰 付候 [1870 明治3.10] 武生病院診察方兼種痘方
48	斎藤逢山	雑類	町医師	[1858 安政5.12] 種痘針御用ニ付銀50匁被下 [1858 安政5.12] 種痘方被仰付
49	石田一策	雑類	町医師	[1858 安政5.12] 除痘館監定方被仰付候 [1859 安政6.12] 当番皆勤致候ニ付御褒詞 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出 勤ニ付御褒詞
50	梶井養順	御国町方 新番格以下 増補雑輩 雑類	御目見町医師 会社魁病院准四等 医(准診察方兼 小司薬生)	[1858 安政5.12] 除痘館定出勤ニ付銀50匁被下 [1859 安政6.12] 除痘館定出勤格別出精其上鍼御用等 相働候ニ付銀50匁被下 [1861 文久1.12] 除痘館当番皆勤其余番外出精ニ付銀 50匁被下 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数十度致 出勤格別出精ニ付御褒詞 [1865 元治2.01] 除痘館格別出精且年来定体相働候ニ 付御目見医師被仰付候 [1870 明治3.02] 病院種痘方 [1870 明治3.06] 種痘方兼禁錮所診察方
51	高井見竜(雄作)	新番格以下 増補雑輩 雑輩之類剥札 雑類	御匙医師取扱 会社魁病院種痘 方主務 兼診察方准三等医	[1858 安政5.12] 除痘館定出勤ニ付銀50匁被下 [1859 安政6.12] 除痘館定出勤格別相働ニ付銀50匁被下 [1861 文久1.12] 除痘館定出勤格別出精ニ付銀70匁被下 [1862 文久2.12] 種痘御端立以来接続方万端格別出精 相働候ニ付御匙医師取扱被仰付、其身一代御扶持方 忝人扶持 [1863 文久3.12] 除痘館御端立以来引続格別致出精候 ニ付年始御礼御目見被仰付 [1865 慶応1.12] 除痘館出勤接続方見習定出勤其上勤 功も有之二付其身一代帯刀被指免 [1870 明治3.02] 代替之上病院種痘方 [1870 明治3.12] 病院附属、調合方并種痘主務
52	細田竜淵	雑類	御通懸御目見医師	[1858 安政5.12] 除痘館定出勤ニ付銀50匁被下 [1859 安政6.12] 除痘館御端立以来定出勤年々格別出 精相働ニ付銀70匁被下 [1861 文久1.12] 除痘館定出勤格別出精ニ付銀70匁被下 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数十度出 勤且年来出精格別御用便相成候ニ付銀150匁被下候

No.	氏 名	出 典	業務・修行先等	関連業務等
				[1865 元治2.] 除痘館御賞銀200匁被下 [1865 元治2.12] 除痘館当番皆勤、番外数十度致出勤 年来骨折相勤候ニ付御通懸御目見被仰付銀150匁被下 [1866 慶応2.12] 除痘館当番致皆勤且番外数十度致出勤 候ニ付銀150匁被下置候
53	加藤桂寿（珪寿）	雑類	御通掛御目見町 医師	[1858 安政5.12] 除痘館定出勤ニ付銀50匁被下 [1859 安政6.12] 除痘館御端立依頼定出勤格年々格別 相勤候ニ付銀70匁被下 [1861 文久1.12] 除痘館当番皆勤其余番外出精ニ付銀 50匁被下 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数十度致 出勤格別出精ニ付御褒詞 [1865 元治2.01] 除痘館格別出精且年来定体相勤候ニ 付御目見医師被仰付候
54	玉村東斎	雑類	町医師	[1858 安政5.12] 除痘館打続皆勤ニ付銀30匁被下
55	石塚泰輔	雑類	町医師 御通懸御目見	[1859 安政6.11] 除痘館定出勤鍼御用等格別相勤候ニ 付銀50匁被下 [1861 文久1.12] 除痘館定出勤格別出精ニ付銀70匁被下 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数十度致 出勤且年来出精格別御用便相成候ニ付銀150匁被下候 [1865 元治2.01] 除痘館格別出精相勤候ニ付御通懸御 目見医師被仰付候 [1866 慶応2.12] 除痘館当番致皆勤且番外数十度出勤 候ニ付銀150匁被下候
56	井代淡斎	雑類	金津町医師	[1859 安政6.2] 種痘勤中帯刀被指免候
57	吉田良輔	雑類	御通懸御目見医師	[1859 安政6.12] 当番皆勤ニ付御褒詞 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出 勤候ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館皆勤、且勤功も有之ニ御通懸 御目見被仰付候
58	若栗意齊	新番格以下 増補雑輩	町医 会社病院小司薬 生 兼書記方	[1859 安政6.12] 当番皆勤ニ付御褒詞 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出 勤候ニ付御褒詞 [1870 明治3.02] 病院種痘方助役
59	大月俊輔	雑類	御目見町医	[1859 安政6.12] 当番皆勤致候ニ付御褒詞
60	英貞純	雑類	町医師	[1859 安政6.12] 当番皆勤ニ付御褒詞
61	上田元恭	雑類	町医師	[1859 安政6.12] 当番皆勤ニ付御褒詞
62	村上悦三（三貞・三 悦）	士族	表目医師 奥目医師 医学館授読	[1859 安政6.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出 勤候ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館皆勤、其外番外数度出勤ニ付 御褒詞 [1866 慶応2.12] 除痘館皆勤御褒詞
63	細井又平（春道・忠 恵・玄篤・又兵衛）	士族	表医師 京都 奥医師 薬品出納方	[1859 安政6.12] 除痘館皆勤ニ付御褒詞 [1861 文久1.12] 右同断 [1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤其余番外数度致出勤 候ニ付御褒詞

No.	氏 名	出 典	業務・修行先等	関連業務等
64	大橋湊（玄樹）	士族	茶道 表外科兼帯 奥針医師・奥外科 病院庶務方薬品 出納掛り手伝	[1859 安政6.12] 除痘館当番皆勤御褒詞 [1861 文久1.12] 右同断 [1863 文久3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞
65	市村市十郎（乙助・勘右衛門）	士族	350石・目付	[1861 文久1.05] 除痘館掛り并軍馬掛り（-65. 閏5） [1870 明治3. 閏10] 武生病院并種痘所取建之儀、下山少参事申談可取扱事
66	三崎玉雲（英順・玉樹）	士族	表医師（小児科）・奥医師	[1861 文久1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞
67	大月斎庵	雑類	御目見医師	[1861 文久1.12] 除痘館打続出精ニ付御盃一被下候
68	原道達	新番格以下 増補雑輩 雑類	町医 匙医師 （会社）松病院准 診察方	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤致候ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤且勤功有之ニ付御匙 医師 [1870 明治3.02] 病院種痘方助役
69	井上杏庵	雑類	町医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤致候ニ付御褒詞 [1866 慶応1.12] 除痘館当番致皆勤、其上種痘御端立 以来致出精候ニ付銀3枚被下候
70	石塚泰庵	御国町方 新番格以下 増補雑輩 雑類	町医師・枝病院 書記方 兼応接方	[1863 文久3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞 [1870 明治3.06] 種痘方書記兼翻訳書清書掛り
71	大島友順	雑類		[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出 勤候ニ付御褒詞
72	井上養山	雑類	町医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数十度出 勤、且年来出精御用便相成候ニ付銀50匁被下置候
73	永井良橘	雑類	町医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番致候ニ付御褒詞
74	河合祥蔵	雑類	町医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出 勤ニ付御褒詞
75	近藤元真	雑類	御目見医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出 勤ニ付御褒詞
76	吉羽潤造	雑類	町医	[1863 文久3.12] 除痘館皆勤、其余番外数度致出勤ニ 付御褒詞
77	上田左伝	雑類	町医	[1863 文久3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞
78	古市周南	雑類	町医	[1863 文久3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞
79	戸田一庵	雑類	町医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞
80	山本匡輔（良哉）	子弟輩	長崎（医道修行） 医学所授読・医 学教授	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出 勤ニ付御褒詞 [1865 元治2.01] 除痘館皆勤ニ付御褒詞
81	笠原浜人（健蔵・竜 哉）	子弟輩	町医師 医長介病院主務 長崎県病院勤務 雑類	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞
82	笠原白翁（良策）	雑類	御目見医師	[1860 万延1.9] 内願之通、休息被仰付候、御平脈拝 診被仰付ニ付御扇子式、御盃并御袷被下置 [1862 文久2.12] 年来医業厚心懸候ニ付為御合力米拾 俵ツ、年々被下候

No.	氏 名	出 典	業務・修行先等	関連業務等
				[1866 慶応2.12] 旧来医道厚心懸且又種痘を始功績も有之二付御合力米拾俵御増、都合式拾俵ツ、年々被下候
83	榎並彦作（宋純）	士族	奥御鍼医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出勤候ニ付御褒詞 [1865 元治2.01] 除痘館当番皆勤、御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館皆勤、其上番外数度出勤ニ付御褒詞
84	花本謙蔵（謙蔵）	剥札	表医師・奥医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 除痘館皆勤御褒詞
85	大岩円（本立）	士族	表医師 奥医師・奥外科 会社准一等医旭 病院主務	[1863 文久3.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 除痘館皆勤御褒詞
86	舟岡周介（周斎・周伯）	士族	表医師・句読師・ 匙医師	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出勤候ニ付御褒詞 [1869 明治2.05] 除痘館掛り被仰付
87	吉田貞庵	雑類	匙医師取扱	[1863 文久3. -] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞
88	井上周一	新番格以下 増補雑輩	町医 (病院) 調合方手伝	[1865 元治2.12] 除痘館皆勤ニ付銀100匁被下 [1866 慶応2.12] 除痘館当番致皆勤且番外数十度出勤候ニ付銀100匁被下候 [1870 明治3.06] 種痘方兼禁錮所診察方 [1871 明治4.12] 会社、魁病院小司薬生兼種痘方
89	三崎宗仙	剥札	表医師・奥医師 匙医師格	[1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 除痘館皆勤御褒詞
90	岡部外一郎（養竹）	士族	表医師・洋書句読師 奥医師・奥鍼医師 病院回診方兼初期	[1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 除痘館皆勤御褒詞
91	吉田有斎（謹三）	子弟輩	奥鍼医師 長崎(解剖術修行)	[1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤、其上番外数度出勤ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 右同断
92	内海元策	子弟輩 新番格以下	病院種痘方書記	[1863 文久3.12] 除痘館当番皆勤、其余番外数度致出勤候ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館定出勤ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 右同断 [1867 慶応3.02] 病院種痘方書記
93	真杉諒平	新番格以下	江戸(医道修行) 会社旭病院准診察方	[1865 慶応1.12] 除痘館定出勤致候ニ付御褒詞 [1866 慶応2.12] 右同断 [1870 明治3.02] 病院種痘方書記
94	山脇玄（玄寿・元寿）	子弟輩	長崎(医術修行) プロイセン留学	[1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤、其上番外数度出勤ニ付御褒詞
95	有賀琢二（義軒・元琢）	士族	表医師・奥医師 長崎(医術修行) 執匙試補 会社薬品出納方	[1860 万延1.12] 除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞 [1865 慶応1.12] 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞

No.	氏 名	出 典	業務・修行先等	関連業務等
96	高桑実	新番格以下 増補雑輩	町医師・長崎（医 術修行） 会社泉病院主務 足羽県権大属 医業取締	[1869 明治2.12] 医学所訓導種痘所掛り
97	宮永典常	新番格以下 増補雑輩	町医・洋学句読 師 翻訳方 教授（医学兼独 逸学）	[1869 明治2.12] 医学所訓導種痘所掛り
98	寛貞蔵	御国町方 新番格以下 増補雑輩	町医 会社病院准三等医 大司薬生兼診察方	[1869 明治2.12] 種痘方 [1870 明治3.02] 病院種痘方
99	芦野三省	御国町方 新番格以下 増補雑輩	町医 会社病院准三等 医診察方	[1870 明治3.02] 病院種痘方
100	梅田謙斎	御国町方 新番格以下 増補雑輩	町医・病院看護 枝病院廻診方介	[1870 明治3.02] 病院種痘方
101	今井玄良	新番格以下 増補雑輩	町医・病院看護 会社魁病院三等医 （診察方）	[1870 明治3.02] 病院種痘方
102	前田松庵（好）	元陪臣		[1870 明治3.11] 武生病院庶務兼種痘執刀
103	沢崎鷗外	元陪臣		[1870 明治3.11] 武生病院庶務兼種痘執刀
104	堀田貞訳	御国町方	町医	[1870 明治3.02] 病院種痘方
105	今井元良	御国町方	町医	[1870 明治3.02] 病院種痘方申付候事
106	原平人	御国町方	御匙支配	[1870 明治3.02] 病院種痘方
107	若栗定斎	御国町方	町医	[1870 明治3.02] 病院種痘方
108	井上一庵	御国町方 新番格以下 増補雑輩	町医 泉会社大司薬生 兼診察方	[1870 明治3.06] 種痘方書記兼翻訳書清書掛り
109	林昌斉	御国町方 新番格以下 増補雑輩	町医 准四等医准 診察方兼小司薬生	[1870 明治3.06] 種痘方書記兼翻訳書清書掛り
110	千葉英造	新番格以下 増補雑輩	町医 （会社）魁病院 小司薬生兼種痘方	[1870 明治3.06] 種痘方兼禁錮所診察方 [1871 明治4.12] 病院小司薬生兼種痘方
111	渡辺等	新番格以下 増補雑輩	町医	[1870 明治3.10] 武生病院診察方兼種痘主務
112	宇賀治元民	新番格以下 増補雑輩	町医	[1871 明治4.12] 会社魁病院 診察方兼書記種痘方
113	村瀬侃造	新番格以下 増補雑輩	会社魁病院 小司薬生兼種痘方	[1871 明治4.12] 病院小司薬生兼種痘方

注)「関連業務等」は、各人の履歴事項から種痘関連のみを抽出・要約したもので、全体の配列は、履歴事項の初出年月日によった。